

— 次の文章を読んで問いに答えよ。

得意な事があった事 今じゃもう忘れてるのは

それを自分より 得意な誰かが居たから

BUMP OF CHICKENの「才悩人応援歌」は、このような歌い出しで始まる。

今まさに、私たちは誰もがこのような状況を生きていると言えるだろう。第三次AIブーム以降のAIの出現により、〈私〉が得意だったことを、ずっと〈得意〉にやっていたのをAIを、ほとんど誰でもが使えるようになった。ChatGPTでレポートやプログラミングコードを書き、DeepLで英語論文を訳す大学生は、もはや少なくともに違いない。このような状況下で、〈私〉がプログラミングや英語を学ぶことの意味は何かと問われたら、私たちはどう答えるべきだろうか。「学ぶというプロセス自体に意味がある」という答えが一般的に受け入れられないのは、現在の多くの人は、問題を正しく解くための手段としてのみ、プログラミングや外国語を捉えているからである。しかもここでの「問題」とは、⁽¹⁾タンテキに、「社会で経済的に成功するにはどうすればいいか」ということである。〈問題を正しく解く〉ことが人生の唯一の目的であるとするならば、〈私〉よりも上手に問題を解けるAIを前にした時、私たちはどんな態度を取るべきだろうか。

ゲーム『アイドルマスター シャイニーカラーズ』(以下『シヤニマス』)の登場人物の一人である樋口円香は、常に幼馴染である浅倉透との関係性を通じて自分を位置づけるという宿命を背負ったキャラクターとして描かれている。作中で、透はカリスマ性を備えたある種の「天才」であり、俗人から見れば「異類」として描かれており、周囲の人間からもそのように評価されている。そのような中で、円香だけは「透にできることで、私にできないことはない」と言って、その異類性を否定する。この言葉は、一見すると、円香自身も決して異類にはなれないという自己評価に他ならないように見える。

透と円香の関係は、表面的にはAII〈それを自分より得意な誰か〉と人間II〈私〉との相剋^{そうこく}のようにも読める。しかし、円香の

態度は、実はこのような相剋をそもそも無効化しようとしている。円香はシャニマスのプレイヤー間で最も人気のあるキャラクターであるが、それは円香を通じて描かれている問題が、極めて現代的で普遍的であるからに他ならないだろう。ロボット・人工知能と人間とのインタラクションを研究対象としている情報工学者である私は、この樋口円香の態度の中に、AIと向き合った時の人間の生き方のヒントを読み取りたいと思う。

さて、そもそもなぜAI(人工知能)は人間よりも上手く問題が解けるのだろうか。まずはAIの歴史を振り返ってみよう。第二次AIブームの主役であったエキスパートシステムは、医師や法律家のような専門家の役割を担えるAIを目指して設計された。このシステムでは、問題を解くために必要な知識と、推論の方法(論理)は、あらかじめ人間によって設定される。あえて乱暴に言ってしまうと、このシステムは莫大なページ数の辞書を持っており、その辞書の中から答えを探し出す。この辞書は人間がAIに与えたものである。しかしこの手法には根本的な問題があった。一つは、単純に、人間がAIに与えるべき知識が膨大になると、それをAIに教えるために必要な労力が大きくなること。もう一つは、この手法では、人間が言語化できる知識しかAIに教えることができないことである。例えば、「自転車の乗り方」を、乗れない子供に言語のみで教えることの困難さは、多くの人が経験しているだろう。これがいわゆる「知識獲得のボトルネック問題」だ。

一方、第三次AIブームの主役であるディープラーニングの基本となる機械学習は、この辞書をAI自身が作成する。人間が与えるものは、辞書の元となるデータのみである。

ここで問題となるのは、AIがどのようにして知識を獲得し、どのように推論を行ったかが、人間には——少なくとも非専門家である人間には、⁽²⁾ジメイにはわからないということである。ここではAIはブラックボックスと化してしまい、非専門家にとっては、入力をすれば出力をしてくれる魔法の装置のように認識されてしまう。

このようなブラックボックスが、人間の人生に関わるような判断をしてしまい得る、というのが、近年持ち上がった問題だ。

二〇一九年、株式会社リクルートキャリア(現 株式会社リクルート)が、被採用者が内定を辞退する「内定辞退率」を算出し、採用

活動を行っている企業に提供していたことが問題化した。就職活動という、人生に大きな影響を与える可能性のある場面で、AIを使った判断をしていたことが問題視されたのである。

原理的には、例えば司法の場でも同じ問題が起きうるだろう。過去の刑事裁判の判例をデータとしてAIに学習させて「判決生成AI」を作り、罪状を入力すれば自動的に量刑が出力されるようなシステムを作ることは、原理的には十分可能だ。欧州連合(EU)が二〇二一年に発表したAI規制案では、こういった人事採用や司法の場においてAIを用いる場合、透明性・説明可能性を求めるよう要請している。

就職や司法など、人生に直接的に影響を及ぼすような場面以外でも、AIが人間の判断に影響を与えることは今後より日常的になっていくだろう。例えば、顔色などから人間の体調を判断して、「今朝はリングとヨーグルトを食べるといいですよ」などとアドバイスをする家庭用AIなども登場してくるかもしれない。この時、私たちがAIの内部の情報処理過程を知らずにその判断に従うとすれば、私たちは正体のわからない他者に自分の判断を委ねていることになりはしないか。

⁽¹⁾このような問題を解決しようという目的で提唱されているのが「説明可能AI」(XAI)である。これは、「AIが行っている情報処理過程を、人間(ユーザ)に理解できるように表現しよう」という目的で進められている、AI研究の一分野である。果たしてこの方法で、人間がAIに感じるブラックボックス性という問題を解決できるかどうかについては、後ほど論じよう。

さて、エキスパートシステムと機械学習の根本的な違いはどこにあるのか。それは、前者が正しい知識や推論過程——つまり「正解」を人間が設定して機械に教えるものであるのに対して、後者では機械が自ら「正解」を導き出してしまふところにある。これが「AIのキョウイ」⁽³⁾として、いわゆるシンギュラリティ論などの根拠になっている特徴であるが、しかし、それでは「正解」とは一体何なのだろうか。

郡司^{ぐんじ}ペギオ幸夫^{ゆきお}は、自然知能、天然知能という新たな概念との対比において、人工知能に以下のような新たな定義を与えた。郡司は、人工知能とは、世界の中のデータから自分にとって価値があるもののみを認識するシステムであるとする。人工知能に

とって価値が無いものは、存在しないのと同じなのである。例えば、他者の状態を「他者の感情・他者の欲求・他者の行動」という三つの変数で定義している人工知能は、「他者の体調」という変数を認識することができない。よって、このような人工知能は他者を正しく理解することはできない（これが、一部の研究者が行っている、人工知能・ロボットに「他者のモデル」を実装することで、他者とのインタラクションが可能な人工知能・ロボットを作ろうという試みに、根本的に問題がある理由である）。

さらに郡司は、このような人工知能は、常に「問題」と「解答」を一対一に対応させるとする。言い換えれば、問題が与えられた時に、常に「正解」が一つに決まるのが人工知能である。AIが人間よりも早く「正解」を導き出す、と言った時、実際にはこの程度のことを言っているにすぎない。

このように考えると、説明可能AIの限界がおのずと理解される。AI、つまり人工知能とは、世界の全ての要素を「私」との関係でのみ価値づけるシステムである。例えば、あるAIはリンゴを食べ物として認識して価値づける。このAIは、例えばリンゴを、その色や形状を味わう⁽⁴⁾カンショウブツとして認識することはできない。「そのようにプログラム、もしくは学習すれば認識できるのではないか」と言う人もいるかもしれないが、そのように^{あらかじめ}予めリンゴを食べ物以外として認識するように作られていない限り、リンゴに新しい価値を見出す^{みいだ}ことはできないのである。AIの世界には、AIにとって認識できて価値を定義できるものしか存在せず、それ以外のものは無視される。

説明可能AIがやろうとしていることというのは、このような価値判断の中心である主体のみを取り出して、全く別の主体と交換するということである。論理的に言って、そんなことは絶対にできない。説明可能AIはあくまでインタフェースデザインレベルの話にしかかなりえず、人間がAIを理解する上では何の役にも立たないだろう。

しかし、「私にとってその意思決定過程が理解できないシステムによって、私の人生に関わる決定がなされている」という事態は、必ずしもAIによって生じたものとは言えない。例えば稲葉振一郎は、このようなAIのブラックボックス性は、官僚組織にも当てはまると指摘している。巨大な官僚機構の中で行われる意思決定のプロセスは、その外部にいる一般市民からは見通す

ことができない。果たして、このような官僚組織によって行われる意思決定が〈私〉の人生に影響を及ぼすことと、人工智能というブラックボックスの意思決定が〈私〉の人生に影響を及ぼすこととの間には、どのような差異があるだろうか？

一つの大きな違いは、官僚組織はあくまで人間によって構成されて運営されるものである以上、「外部」を受け入れる余地が、少なくとも潜在的には残されている点である。「外部」とは、そのシステムが全く予期していなかったもの、にも拘らず不意に飛び込んでくるものである。それは官僚組織というシステムの内部の論理では「正解」が導けない問題である。そのような外部に出会った時、官僚組織は自らの内部の論理を大きく変革せざるを得ない——歴史上の多くの政権が経験したように。

一方、人工智能には、外部からの一撃によって変化するという能力はない。なぜなら、そもそも人工智能は外部を認識できないからである。人工智能はあくまで内部の閉じた論理に従って世界を認識し、それ以外の論理は持ちえない。

これが〈私〉の人生の意味とどう関わってくるだろうか。

官僚組織に対しては、〈私〉は常に「外部」になれる可能性を有している。〈私〉はその人生において、官僚組織から知らず知らずのうちに干渉をされている可能性があると同時に、常にその官僚組織を外部から変革・もしくは破壊することができる可能性を有している。この意味で、〈私〉と官僚組織の関係は、ブラックボックスである官僚組織が一方的に〈私〉の人生に影響を与えている、という一方方向のものではない。

一方の人工智能は、全く「外部」を受け付けない。逆に言えば、それは常に〈私〉に対して外部として超然として立つのである。

常に外部に立つものは、異類である。かつては妖怪や神、各種の「異人」などがその役割を担っていた。異類とは、私たちの日常世界の論理の内部に収まらない存在である。前近代でシッソウシヤ⁽⁵⁾が出た時に、「神隠し」や「天狗隠し」に遭ったのだ、と説明されたのは、日常世界の外部に原因を求めたことで、因果関係の追及・責任の追及を無効化するためであった。

人工智能がこの異類の役割を担おうとするのであれば、そのブラックボックス性は保たれないといけない。⁽⁶⁾人工智能は説明可能な存在であるからこそ、私たちの日常の論理を相対化してくれるのだ。

(松井哲也「AIの手を掴むくらいなら溺れて死ぬ」による)

(注) ○インタラクション——相互作用。 ○ボトルネック問題——難点が一か所に集中している型の問題。

○ディープラーニング——音声認識や画像認識など、コンピュータに人間と同等の情報処理機能を学習させる機械学習の一種。

○シンギュラリティ論——ある時点でAIが人間の能力を超える段階に至るという論。

○インタフェースデザイン——ユーザにとっての機器の使いやすさを向上させるデザイン。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)(4)(5)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問(二) 傍線の箇所(ア)に「なぜAI(人工知能)は人間よりも上手く問題が解けるのだろうか」とあるが、筆者はその理由についてどのように述べているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)「このような問題」とは、どのような問題か。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「このような官僚組織によって行われる意思決定が〈私〉の人生に影響を及ぼすことと、人工知能というブラックボックスの意思決定が〈私〉の人生に影響を及ぼすこととの間には、どのような差異があるだろうか?」とあるが、その「差異」とはどのようなことか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「人工知能は説明不可能な存在であるからこそ、私たちの日常の論理を相対化してくれるのだ」とあるが、筆者がそのように考える理由を、本文全体の内容を踏まえて七十五字以内で説明せよ。

二 二 次の文章を読んで問いに答えよ。

明治三十年も妻木は、静岡、愛知、岐阜、兵庫と忙しく飛び回り、家を空ける日が続いた。各所で葉煙草取扱所の建物を新築するためである。

赤坂に戻れば戻ったでゆっくり休む暇もなく、武田を呼んでは図面を広げ、なにごとかを話し合っている。頻繁に家にやって来るようになって、武田の硬い面持ちは変わらず、ミナが話しかけたところで目も合わさずに疎ましげに相槌を打つばかりだった。夫と似ているところもあるから一時は親近感も湧いたが、⁽¹⁾こうも陰気だとりつく島もないようで、近頃では挨拶だけですぐに退散ということが続いている。

その武田が、珍しく頬を紅潮させて語るのを見たのは、夏も盛りの頃だった。

「僕もそう思います。西洋風の建物ばかりで街が造られていくのは反対だ。これからは西洋の技術を用いつつ、日本の美を表した建築物を増やしていかなければならない。その土地に合った景色というものがあるはずです」

演説会で壇上に立った壮士のごとく、彼は卓を叩かんばかりにして熱弁を振るうのだ。夫はいったいなにを提言したのだろう。あの武田がこれほど興奮するものとはなんだろう——ミナは気になりつつも、お茶を出しただけで部屋を辞した。

「じゃあ、君を正式な助手に推すがいいか？ 学業との両立になってしまうが」

妻木の声が襖越しに聞こえる。

「むろんです。僕にとっては大変光栄なことです」

跳ねる声で、武田が応えている。

これから程なくして、妻木の内務技師と大蔵技師の兼任を受けて、両省の技師が集まり、ささやかな交流の会が開かれたらしい。その夜半、妻木は鎗田に抱えられるようにして家に戻った。だいぶ酔っている。

「まあ、こんなに飲んで。すみません、鎗田さん、ご迷惑をおかけして」

酒といってもこれまでたしなむ程度だったからミナは内心動じ、兎にも角にも布団を敷いて、鎗田に手伝ってもらい、背広だけ脱がせた妻木をそこに寝かせた。

「本当にお手数をおかけしました。でも、あんなに酔うまで飲むなんて」

茶の間に鎗田を通して茶を出したあと、ミナはひとしきり詫言を並べた。鎗田は、「なんのなんの」と平素と変わらぬ朗らかな笑みで応え、

「なにも調子に乗って飲み過ぎたわけじゃあないですよ」

快活に繕うのだ。

「なにしろ妻木さんってえ人は、人一倍周りに気を遣う方ですからね、芯まで疲れちゃうんでしょう。例えば大審院の現場みてえに大勢の人間を使うときも、ひとりひとりに目配りしてるんです。わっちなんぞ近くで見てて、よく氣力が持つもんだと感心しているくれえなもんで。それで酒の回りが早かったんでしょう」

「でも、そういう現場を楽しんでいるんじゃないのかしら。いろんな職人さんに助けられているって、とっても楽しそうに宅では話すんですけれど」

ミナは鎗田の告げた理由に合点がいかず、寝間のほうへと目を遣った。

「うん……まあ、今日は少し厄介な言い合いもあったかしれねえな。酒が過ぎたのは、そっちの原因のほうが大きいか」

君も事務所でも起こしちゃどうだ、官員であることに固執せず個人で仕事を請け負っても成功するんじゃないか——妻木は同僚たちからそうけしかけられたという。共にドイツに渡った河合浩蔵は今年内務省を退官し、個人で神戸地方裁判所の設計を請け負うことになった。渡辺譲もドイツから帰朝後まもなく野に下り、清水組で設計技師を務めた。同じように妻木も官職を解かれたほうが、建築家として名があがるのではないかと。

「親切ごかしで、そういう陰險なことを言う奴がいるんですよ」

(ア) 鎗田が憤然と吐き捨てる。

「陰險……なんですか？」

夫の技量を認めてもらった発言だろうと聞いていたミナは、首を傾げた。

「まあね。それとわからねえように言ってるつもりでしょうが、わっちからすりゃ、まったくケツの穴の小さい奴らの小競り合いですよ。技師の間にゃね、ふたつの流派があるんです。ひと言で言やあイギリス流とドイツ流ですな。臨時建築局の最初の技師長は松崎さんでしたからね、当時はドイツ派が主流だった。そら、松崎さんつてのはドイツに長らく住んでましたでしょう。だから、日本語よりドイツ語のほうが達者なくれえなもんで」

なるほど、それで松崎の言葉遣いはどこかぞんざいに聞こえるのか、とミナはそつと納得する。

「ただね、近頃は工部大学校出の連中が幅を利かせるようになりましてね。奴らコンドルに学んてますからね、イギリス式の建築技術を重んじている。それに、なんですか、同じ学校出で固まるんだねえ。妻木さんは大学も途中で辞められたでしょ。わっちらと同じ、腕一本で上がってきたところがある。だから毛色も違うんでしょう。そのくせ出世頭ですからね。やっかみも多いんですよ」

先だって、出世を称えたときに妻木が見せた苦い表情を思った。現場を離れなければならぬことへの寂しさだとばかり思っていたけれど。

「つまり、主人は、暗に勤めを辞めろと言われてるんでしょうか」

「いやあ、なんですかねえ。しかしそこは妻木さんのことですからね、我関せずというふうを装ってますよ。でも建築のことになると案外譲らないからさ、辰野さんあたりにゃ目を付けられてるんじゃないかな」

辰野金吾は、松崎が組織した造家学会の創立委員である。鎗田によれば、大変な野心家であり、気性も激しいという。妻木が請け負った東京府庁舎の設計は、彼がドイツへ渡っている間に辰野へと流れそうになったが、それを妻木が帰朝後に取り戻し、辰野に一切関わらせなかったことで、確執が生じたこともあるらしい。

「内務技師には辰野さんと親しい者も多いですからね。妻木さんの足を引つ張ろうつて輩も、そりやいますよ」
鎗田の話に、ミナは思わず着物の袂を強く掴んだ。

「酒の席でのね、そういう会話が煩わしかったんでしょ。妻木さん、とつと酔っ払っちゃったんですね。まあいいご判断ですよ。やつかみなんぞ逐一相手にすることもないですが、無視すりゃ角が立ちますから」

「あの……主人は、局内で肩身の狭い思いをしているんでしょうか？」

「いえ。そのご心配には及びません。完璧に仕事もこなしていますし、誰より頼られて重要な役目も任されてる。去年は高等官に叙せられて三級俸、今年はさらに上がって二級俸を下賜されるくらいですから。ただ、なんですか、建築家ってのは批判が好きなんだねえ。正面きつた喧嘩とは違うんですよ。陰でさ、あいつの造ったあれはダメだ、奴のは今ひとつだ、ってしょっちゅうそんな話をしていますよ。女々しくって見てられませんや」

鎗田は肩をすくめた。⁽²⁾竹を割ったような彼の性質からすれば、男の陰口はことさら耐えがたいものに映るのだろう。

「妻木さんはそういうのが嫌いなんですよ。派閥を作るのも嫌、決まった人間でつるむのも嫌。そうすると世界の見え方が狭くなるからなんだって」

「世界の見え方、ですか」

「そう。視界が狭くなるってさ。局内でどう幅を利かせていくか、そういうことばかりに囚われちゃうでしょう。自分の出世なんぞで右往左往するより、建築家全員で知恵を出し合って、いい街を造り上げなきゃならない時なんだ、ってしょっちゅう言ってますよ」

鎗田は茶で喉を湿らせてから、

「妻木さんは、目指している地点が、他とはだいぶ違うんだねえ」

遠い目をして、あたかもひとり言のようにつぶやいたのだ。

「出掛けないか、少し」

庭に水をまいていると、声が掛かった。縁側でくつろいでいた妻木が、新聞越しにこちらを見ている。

「どちらへ？」

「なに、すぐそこさ」

栃木の葉煙草取扱所建設の仕事に一段落つけて、東京に戻って二日目のことだった。庭では山茶花が燃えるように咲き、落ち葉を掃く音がそこに立っている。

「着物もそのままでもいい。すぐそこだから」

重ねて言われ、ミナは小走りに家に入って、割烹着を脱いだ。髪を整え、薄く紅を引く。廊下に出ると、すでに妻木はシャツの上に外套を羽織って、玄関口に立っていた。

「私、こんな普段着でよろしいのかしら」

「ああ。ちよいと歩くだけだ」

そう応えたのに、妻木は日枝神社から溜池のほうへと歩を進めるのだ。

「近くじゃございませんの？」

「そんなに歩きはせんさ」

彼は背を向けたまま言い、けれどそれから二十分ほど黙々と歩き続けた。溜池から葵橋を過ぎ、彦根井伊家の上屋敷の方角へと向かう。遠出するならそれなりの格好をするのに、と夫を恨めしく思う。どこへ行くのか見当もつかないまま仕方なくついていくと、やがて平坦に舗装された、まるで大河のように幅の広い道路に出た。桜田通りだ。

「あの……どちらへ」

(3) 言いさして、「あ」と息を呑む。

目の前に途方もなく大きな洋風建築物が現れたのだ。

赤煉瓦が鈍色の光を受けて、柔らかく景色に溶け込んでいる。石がアーチ状に積まれて窓をかたどっている。貴婦人のように凜と美しい佇まいなのにどこか親しみやすく、温かみすら感じる建物だった。

「これ……大審院ですね、昨年完成したという」

建物を呆然と見上げて、ミナはつぶやいた。

「ああ。君にも見せておきたいと思って」

「なんて立派なこと。それに、本当にきれい」

感動を表すのに月並みな語彙しか浮かばないことに焦れつつも、夫が自分の知らないところでこれほどの大仕事を成し遂げたのだと思えば誇らしく、同時に恐ろしくもあった。彼がまた少し遠くに行ってしまったような心細さも覚えた。

「この建物は僕の設計じゃあないんだ。そら、いつとき留学していたドイツの、エンデという建築家の作品だ。ただ、意匠は多少造り替えた。日本ならではの装飾を織り込んでみたくてね」

「日本風の装飾に？」

「ああ。西洋の柱に大瓶束なんぞを合わせてみた。天井にも海老虹梁のような日本の伝統的な装飾を施してね。エンデが見たら、さぞ驚くだろうな」

いたずらっぽく妻木は笑う。

「でも、現場の職人はみな賛同してくれただ。彼らがいなければ、そんな意匠にすることは叶わなかった。僕は紙の上で図面を引くことしかできないが、彼らはそれを実際に形にしてくれる。本当に素晴らしいよ」

先だって鎗田が漏らした局内での確執のようなものを、今横にいる妻木の表情から感じ取ることではできなかった。彼は濁りのない健やかな笑みを、大審院に向けている。その笑みに、哀しい影は見えない。ただただ、自らの仕事を愛おしみ、楽しんでい

る顔だった。
——この人はきつと、自分の役目に救われているのだ。⁽¹⁾ 建築家という仕事に。

心の底から安堵した。同時に、私がどう支えても、こんな笑顔にさせることはできなかったな、と不甲斐なさも覚える。

「君が以前、言ったことがあったね」

不意に言われて横を見上げると、日に焼けた顔に白い歯を覗かせて、夫がこちらを見詰めていた。

「江戸には、いいところがたくさんあったのに、って。みんなお伽噺のようだって」

「……ええ」

一緒になつてしばらく経った頃だ。こんなふうに散歩に出たとき、どんどん変わっていく街並みが寂しく思え、つい口走ったのだ。

「こうして、西欧風の建物が建ってしまうと、江戸の頃はまた遠くに行っちゃまうような気がするかもしれない。国の機関はどうしても、機能を重んじる向きがあるからね。だが、僕が設計するからには、新たな技術を取り入れながらも、この国の、自分たちの根源を忘れずに引き継いでいくような建物にしたいと思っている。そういう建物がいくつも建つことで、江戸のような、心地いい街並みがきつとできる。子供たちの、またその子供たちの世代まで、誇りになるような街がね」

妻木はそこで、再び大審院に視線を戻した。

「哀しい思いをするのは、もうたくさんだろう？」

え？ と喉元まで出掛かった声を、すんでのところでミナは呑み込んだ。

——私が、哀しそうに見えたのだろうか。江戸に生まれ育った者が抱く喪失感を、夫は私の中にも見ていたのだろうか。これまでふたりで歩いた道程が、目の前に浮かんでは消えていく。

「いい街にするよ、必ず」

妻木は静かに宣して、大審院に向かって大きく伸びをした。

（木内昇『剛心』による）

(注) ○妻木——妻木頼黄(一八五九—一九一六)、明治時代の代表的な建築家。

○武田——武田五一(一八七二—一九三八)、建築家・建築学者。妻木の指導の下、建築に従事する。

○鎗田——鎗田作造。妻木の下僚に当たる職人出身の技師。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)の語句の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)に「鎗田が憤然と吐き捨てる」とあるが、ここには鎗田の何に対するどのような心情が表れているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)に「自分の役目に救われているのだ」とあるが、「自分の役目に救われている」とはどのようなことか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「みんなお伽噺のようだって」とあるが、「みんなお伽噺のようだ」とはどのような意味か。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「え？」と喉元まで出掛かった声を、すんでのところでミナは呑み込んだ」とあるが、ここで「え？」という声が出掛かったのはなぜか。本文全体の内容を踏まえて九十字以内で説明せよ。

三

幼い頃に母を亡くした大君^{おおいぎみ}と中の君は、最近父八の宮が死去したことで悲しみに沈んでいる。以前から中の君と文^{ふみ}のやり取りがあった兵部卿宮^{ひょうぶきやうのみや}(匂宮^{におうみや})は、京から姉妹が住む宇治の山荘に度々弔問の使者を遣わす。文章を読んで問いに答えよ。

兵部卿宮よりも、たびたびとぶらひきこえたまふ。さやうの御返りなど、聞こえん心地もしたまはず。おぼつかなければ、中納言にはかうもあらざるを、我をばなほ思ひ放ちたまへるなめりと恨めしく思^{おぼ}す。紅葉^{もみぢ}の盛りに、文など作らせたまはむとて、出で立ちたまひしを、かくこのわたりの御追遥^{せうえう}、便^{べん}なきころなれば、思しとまりて口惜しくなん。

御忌^{いみ}もはてぬ。限りあれば涙も隙^{ひま}もやと思しやりて、いと多く書きつづけたまへり。時雨^{しぐれ}がちなる夕つ方、

「牡鹿^{をしが}鳴く秋の山里いかならむ小萩^{こはぎ}がつゆのかかる夕暮

ただ今の空のけしきを、思し知らぬ顔ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野辺もわきてながめらるるころになむ」などあり。げに、いとあまり思ひ知らぬやうにて、たびたびになりぬるを、なほ聞こえたまへ」など、中の宮を、例の、そそのかして、書かせたてまつりたまふ。今日までながらへて、硯^{すずり}など近く引き寄せて見るべき物とやは思ひし、心憂^{こころう}くも過ぎにける日数^{ひかず}かな、と思すに、またかき曇り、もの見えぬ心地したまへば、押しやりて、「なほえこそ書きはべるまじけれ。やうやうかう起きゐられなどしはべるが、げに限りありけるにこそとおぼゆるも、疎^{うと}ましう心憂くて」と、らうたげなるさまに泣きしをれておはするもいと心苦し。

夕暮のほどより来ける御使^{つかひ}宵すこし過ぎてぞ来たる。「いかでか、帰りまゐらん。今宵^{こよひ}は旅寝して」と言はせたまへど、「たち返りこそ参りなめ」と急げば、いとほしうて、我さかしう思ひしづめたまふにはあらねど、見わづらひたまひて、

(イ) 涙のみ霧^きりふたがれる山里はまがきにしかぞもろ声になく

黒き紙に、夜の墨つぎもたどしければ、ひきつくろふところもなく、筆にまかせて、押し包みて出だしたまひつ。

御使は、木幡^{こはた}の山のほども、雨もよにいと恐ろしげなれど、さやうのものを怖^おぢすまじきをや選^えり出でたまひけむ、むつかしげなる笹^{ささ}の隈^{くま}を、駒^{こま}ひきとどむるほどもなくうち早めて、片時に参り着きぬ。御前^{おまへ}にても、いたく濡^ぬれて参りたれば、禄賜^{ろく}ふ。さ

きざぎ御覧ぜしにはあらぬ手の、いますこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覧じつつ、とみにも大殿籠わほとのこもらねば、「待つとて起きおはしまし、また御覧するほどの久しきは、いかばかり御心にしむことならん」と、御前(ウ)なる人々ささめききこえて、憎みきこゆ。ねぶたければなめり。

まだ朝霧深きあしたに、急ぎ起きて奉りたまふ。

「朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれとも聞く

もろ声は劣るまじうこそ」とあれど、あまり情なさけだたんもうるさし、一ところの御蔭かげに隠るへたるを頼みどころにてこそ、何ごとも心やすく過ぐしつれ、心より外ほかにながらへて、思はずなることの紛れつゆにてもあらば、うしろめたげにのみ思しおくめりし亡き御魂たまにさへ瑕きずやつけたてまつらん、となべていとおつしましう恐ろしうて聞こえたまはず。

(『源氏物語』による)

(注) ○中納言——薫。匂宮と同様に姉妹との交流があった。 ○御忌——八の宮没後四十九日の忌の期間。

○中の宮——中の君。 ○まがき——竹や柴などを編んで作った垣根。 ○木幡の山——宇治と京の間にある山地。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)を文脈に即して口語訳せよ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「げに、いとあまり思ひ知らぬやうにて、たびたびになりぬるを、なほ聞こえたまへ」を、文意が通じるように適宜言葉を補って口語訳せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)の「涙のみ霧りふたがれる山里はまがきにしかぞもろ声になく」という歌は、誰が詠んだ、どのような趣旨の歌か。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「御前なる人々ささめききこえて、憎みきこゆ」とあるが、「御前なる人々」は、誰のどのような様子に対してこのように反応しているのか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「聞こえたまはず」とあるが、なぜか。本文の内容に即して六十五字以内で説明せよ。

四

次の文章を読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

閨門外上津橋、朱某家貧、欲入山尋死、遇仙解救、授測字一
 書、其驗如神。求之者必需預定日期、每日只測一字、取資
 一兩。懸牌門首、某日測某人字。時吳三桂將反、有文書來向
 蘇藩庫借餉十萬兩。方伯慕公天顏躊躇莫決、乃延朱測
 字、且告以故。朱曰、「請命一字」。適几上有殘柬、慕公隨手
 翻轉、指正字為一枚。朱曰、「不可借」。正似王字、王心已乱。且柬正
 面合几上、正而反矣、即反之兆也。慕即拒之。未幾、果応其言。
 其子亦習父業、占驗不減于父、但非一日測一字也。有人以武
 字問有子否。朱曰、「絶矣」。一代無人、自此而止。其人果無後。

朱子死、其書徧尋不得。或以為仙人収去。遂失其伝。

(錢泳『履園叢話』による)

(注) ○閶門——江蘇省蘇州の城門。 ○測字——依頼者が示した漢字の全体や部分を見て行う占い。

○取資——料金をとること。 ○呉三桂——明末清初の武將。清朝に降伏した。

○蘇藩庫——江蘇省の財政を司る江蘇布政使司の倉庫。 ○餉——軍資金。

○方伯——布政使司の長官である布政使の別称。 ○慕公天顏——江蘇布政使であつた慕天顏のこと。

○几上——机の上。 ○殘柬——手紙や書類などの反故紙、切れはしの類。

○枚——占うこと、またそのための材料。

問(一) 傍線の箇所(1)「将反」、(2)「無後」の意味を記せ。

問(二) 傍線の箇所ア「正似王字」、イ「未幾、果応其言」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。

問(三) 傍線の箇所ウ「占驗不減于父、但非一日測一字也」を口語訳せよ。

問(四) 傍線の箇所a「慕即拒之」とは、どのようなことか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所bに「絶矣」とあるが、朱はなぜそのように告げたのか。本文の内容に即して七十字以内で説明せよ。